

「eプラットフォーム」オンラインフォーラムを振り返って

今年4月に始めたテーマ別オンラインフォーラムを振り返り、いただきましたさまざまな示唆を書き留めたメモです。（スピーカーのご所属等は省かせていただいています。）

*各回の詳細はフォーラムページをご覧ください。

(<https://e-platform.org/course/view.php?id=101>)

また、各回のスピーチでご提供いただきました資料も上記のページに掲載していますのでご覧ください。（資料にアクセスするにはログインが必要です）

2021年12月 柵 富雄

第1回 地域活動を応援するオンラインプラットフォームとは

「効果的なプラットフォームをどのように作るか」というタイトルで、飯盛さんにスピーチいただきました。目指す地域づくりに、官民学・市民がどのように関わり発展させるかを、プラットフォームの概念でわかりやすく説明いただきました。

27年前に始めたインターネット市民塾の具体化の際に、活動の成否を決定した大きな要素だったと言えるほど、プラットフォームの考え方は大事だと思います。

そしてこのフォーラムで考えていく「持続可能社会・地域を目指した生涯学習・社会教育」を具体化するためにも、大事な基調になることを確信した回でした。

第2回 成熟社会で働くとは

佐藤友美子さんに「学び続ける力を育てるために」というタイトルでスピーチをいただきました。私たちが目指す社会と生涯学習との関わりを考えたいとお願いしました。

「成熟社会」が、自立した大人の目指す一つの姿とし、自分なりの「問い」を持ち、学び続けるということが、まさに「生涯学習」を考える基調になったと思います。

「教育も地域も、できることを持ち寄ることが大事」という示唆、「一人で思う、二人で語る、みんなで考える」は、学びが生まれるステップそのものとも思います。

第3回 AI、DX時代に社会人の学びはどう変わるか

立田先生に「多様化する学習法 ～欧米にみるイノベーション～」というタイトルで欧米の高校生のイノベティブな学び方などを紹介していただきました。学校教育のこのような大きな変化を、生涯学習・社会教育は無縁ではないという認識を持ち、大いに触発を受けた回でした。

この回のフォーラムののち、私は「デジタル社会の学びのかたち」（北大路書房）に書かれている「徒弟制から公教育制度へ、そして生涯学習時代へ」というキーワードがとても気になりました。そこでの「生涯学習時代」は、学びの「責任」「期待」「内容」「方法」「評価」「場所」「文化」「関係性」がイノベティブに変わることを論じていて、「学ぶべきことの再考」や「教育における役割の再考」など、このフォーラムの論点にも大きく関わるものとなっています。

第4回 人、情報、学びがつながるユニバーサルなプラットフォームをどうデザインするか

ユニバーサルデザイン研究で有名な関根さんに「誰もがつながりやすいユニバーサルなプラットフォームデザインとは」と題してお話をいただきました。

関根さんが憧れるという海外の学びの場をご紹介され、どうして日本ではこのような多くの社会人が学ぶ場が見られないのか、その問題意識に大いに共感しました。「日本の学びは社会のニーズに合っているか？」という投げかけもありました。

市民の側にも問題意識が向けられ、「障害者や高齢者が一緒に住む社会、SDGsが目指す社会への当事者意識が薄いのではないか。」というもの。そのことが主体的な「問い」を持たない市民、ひいては主体的な学びが生まれにくい背景があるのではと気付かされま

した。
「学びに目を向けていない社会人が多くいるのでは？」など、以降の論点に大いに関わるものでした。

第5回 人生100年時代の生き方、働き方、学び方

この回はテーマに対して「市民」と「教育」の二つの視点から考えようと、ダブルキャストで企画しました。

まず、柳原さんに生涯現役実践論をご紹介いただきました。ご自身の経験をもとにされているだけに、「支援側」や「研究の視点」とは全く異なる示唆をたくさんいただきました。社会の大きな変化を「よそごと」と考えているうちは、自分の生き方、働き方は何も変わらないどころか、取り残されるという強いメッセージでした。

そして、これからの社会で生きがいを持った人生にするには、学び続けることが不可欠と結んでいます。社会のパラダイムシフトの中で、「学びたい人が学びたいことを学ぶだけで良いか？」という「生涯学習」への問いにもつながるスピーチでした。

二人目の藤田先生からは「大学開放の可能性と多様な学びへの期待」と題してスピーチをいただきました。国立大学という巨大な制度の中でも「大学開放の取り組み」を地道に模索していることをご紹介いただきました。

社会人自らが「開放された大学」に積極的に目を向ける必要性も示唆したと思います。その機会を持った私自身も強く感じるどころです。

また、大学が社会人のための地域の生涯学習拠点を目指すeプラットフォームへの考え方も示されています。今一度資料も開き、深めたいところですよ。

第6回 命を守る生涯学習

野澤先生より「次世代を育むために、今大人がすべきこと」と題してスピーチをいただきました。

東日本大震災で生まれた子どもたちの力と、その子どもたちから大人が学んだことをもとに、「大人の責任としてしなければいけないことがある」という強いメッセージをいただきました。

地域・社会の問題に関心が薄い大人が多いとされる中、OECDが示す「学びの羅針盤」（当事者意識を持って主体的に活動する）は、東日本大震災で子どもたちから学んだ大人だけでなく、全ての大人が「命を守る生涯学習」として学び続け次世代につなぐ必要性を強く示唆するものでした。

このことが、「学ばべき生涯学習があるのでは？」というその後のディスカッションでも外せない論点になっています。

第7回 地域でつくる新しい学びのプラットフォーム

和崎さん、畑井さん、松原さんの3人で「リカレント教育を推進するDX時代のe公民館戦略」というプレゼンテーションをいただきました。

公民館職員の現場目線をもとに、DX時代の公民館の役割と地域住民との関係性をイノベータータイプに変える提案が出されました。

その事例としたスウェーデンの「スタディ・サークル」は、地域住民が主体的につくる地域の学びの場として、まさに私たちが求めている社会人の学びへの関わりを描くものでした。

この回のキーノートは、その後の公民館の新しい役割を考えるディスカッションとして継続しています。